

寄生螺類の一種に就て(六)

理學士 平瀬 信太郎

(C) 寄生々活の影響

(1) 吻、*Eulimnien* には一般に吻を有するもの多き如きも、此の種にありては特によく發達せるを認めたりき而して此の吻の先端部の細く尖れるは宿主の組織に突入するに便なり、又組織學上此の先端部の表皮細胞には特にクチクラ層のよく發達せるも宿主より受くる壓に堪ふるがためならむか、又吻腔は宿主に吸着し其の養汁を吸ふに便なるものなりと思惟す。

(2) 顎 (*Kiefer*) 顎を有せざる事は寄生々活の結果と速断し能はず、一般に *Eulimnien* に之を缺くものなり。

(3) 齒舌 (*Radula*) 齒舌を有せざる事も同断なり。

(4) 食道 *Eulimnien* には一般に食道の内壁に襞 (*Falten*) 多きが如し、然るに此の種にありては其の内壁頗る簡單にして、極く僅の縦の隆起あるのみなりき。是亦寄生による食物 (養汁) と大なる關係あらんと思ふ。

(5) 胃、特筆す可き事なし。

(6) 肝臟 *Fermentzelle* に關する研究は後日に譲る。

(7) 腸管、腸管は非常に簡單にして且又其の全長比較的短小なりき是れ多少寄生々活の結果と認む可き事なり。

(論 說) ○寄生螺類の一種に就て (平瀬)

らむと思惟す。

(8) 唾腺、可なりよく發達なしをれり、寄生々活との直接の關係を認めざりき。

(D) 他の寄生螺との比較

消化器官に於て余の種と他の種とを一々比較する事は紙面の都合上略し、茲に一二の特筆す可きものを摘起す可し。KÜHNENTHAL 氏は *Stilifer celebensis* には吻中に血腔 (*Blutraum*) なしと主張すれども余は明に之を認めたりき、又概述すれば *Stilifer celebensis* の消化器官は *Megadenus* 及び *Turtonia* のものに類似すれども NILS ROSEN 氏によれば *Megadenus* に唾腺を認めず、又一方 *Turtonia* の吻腔の細胞は圓筒狀のものなりと主張すれども余の種にありては多角形のものなりき。又 *Turtonia* の食道は多くの迂曲を有し且つ其細胞には纖毛なしと主張すれども余の種は已述の如く之に反す。尙又 NILS ROSEN 氏は *Megadenus* には小腸及び末腸 (*Dünne Endarm*) を認め *Turtonia* に直腸 (*Rectum*) を認めたれども余の種の腸管には之等を區別する事能はざりき、又 *Thyca* 以外の多くの寄生螺には唾腺なしと記述しあるも余は *Stilifer celebensis* に明に之を認めたりきかくの如くにして消化器官

(論 說) ○寄生螺類の一種に就て (平瀬)

を以て他の種と比較する事は困難なりき。

腎臓(Niere)

一八六七年に LANKESTER 氏軟體動物の腎臓を研究なして以來多くの學者は前鰓類の腎臓に關して多大の興味を有するに至りたりき、殊に Pectenbranchien に於ける右腎の消失並に生殖器との關係は面白き問題なり、一九〇二年に DRUMMOND 夫人は此の右腎の消失は生殖腺に變ずる結果なりと主張せりと雖も尙研究の餘地あり。余尙研究中に屬するを以て茲には單に腎臓の解剖並に組織的研究の一部を記述せんとす。

(A) 解剖

腎臓はかなり大なる囊狀體にして外套腔の底部より第一螺層を起點に殆ど第二螺層に達し、肝臓に接せりき、^(第七圖¹)腎臓を貫通するに腸管を以てせる事圖の如きも之は腎臓の腸管を包圍せるものなる事は已述の如し、又結組織を以て包被せられたる腎臓の中央部よりは可なり太き腎脈管出づ之は肝臓より來る脈管と合して腹竇(Abdominalsinus)(血管系の時詳記すべし)に開口す、又腎臓の表面には特別の筋纖維を認めたりき又一般に Pectenbranchien にありては腎臟腔(Nierenkavitat)は一方圓心竇(Pericardialhöhle)と又他方外套腔(Mantelhöhle)と交通するものなれども余の種にありては前者全く消失せり即ち腎心竇管(Reno-Pericardial gang)の欠ける事を認めたりき。而して後者は結組織網(Bindegewebestroma)を経て細孔(Spalt)によりて外套腔に開けり、從て腎臓の開口と稱す可き所に特別の筋肉(Sphinktermuskel)を

認めざりき。

(B) 組織

Trabekeln 大なる腎臟内腔は血液を以て充されたる組織よりなる Trabekeln によりて多くの部分に區分せらるゝを認めたりき(第七圖²)

又腎囊内腔をなせる細胞に次の二種のものあるを観察したり。

(a) Die Sezernierende Zelle.

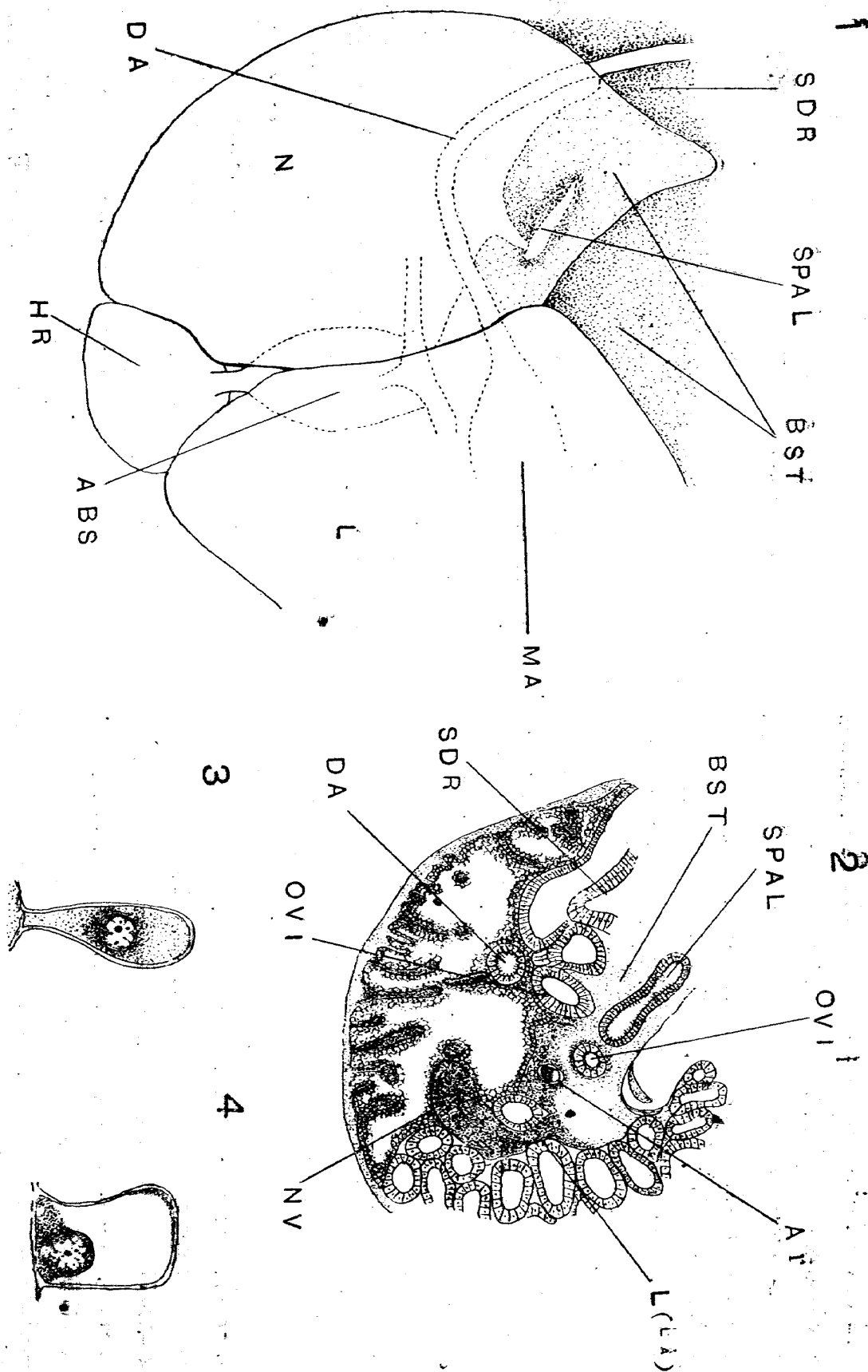
(b) Die Kolbenartige Zelle.

第一種(a)の細胞は普通 Pectenbranchien の Sezernierende Zelle. に相當すべきものなれども纖毛を缺き又大なる腔胞(Vakuole)を有したりき(第七圖⁴)

核は基部にあり、大にして丸くヘマトキシリンを以て可なり強く染り、細胞質は非常に僅少なり、核の直径 0.0064mm. 又此の圓筒狀の細胞の大きさは腔胞如何により一定せざるも一般に第二種の者(b)より大なりき。

第二種(b)の細胞は第一種のものより小にして其の形狀棍棒狀をなし、即ち基膜に近づくに従ひ柄狀に細くなりをれり(第七圖³)細胞質は可なり多く、腔胞なし、核は丸く中央にあり、ヘマトキシリンを以て紫紅色に染る、核仁は丸く明に尙ほ其の他若干の細粒を認めたりき、此の細胞も纖毛なし、又一般に此の第二の細胞は第一種の細胞より數少なく又一般には Trabekeln の先端に多きも

(論 說) (寄生螺類の一に就て (平瀬))



(抄 録) O「トリコニンフィード」の極めて面白い一新属

のなれども余の種にありては至る所第一種の細胞の間に混在せりき、細胞の長さ、0.0144m.m. 幅、0.0040. m.m. 核の直径 0.0038 m.m.

(C) 他の寄生螺との比較

特筆すべきは *Stilifer* sp. 以外の總ての寄生的 *Stilifer* の種類に腎臓の觀察されざる事なり、又 VOIGT 氏は *Entocolax* に腎臓を認めざるも頗る簡單なる囊に過ぎずとなし、又 NILS KOSEN 氏は *Turtonia* に關しては何等記述なきも *Megadinus* の腎臓の存在を認めざるも記述不完全なり、其の他 *Macronalia*, *Stilifer* sp. 等には普通の腎臓ありと記載あるも文献皆詳細を缺き茲に比較し能はず。

(D) 寄生々活の影響

一般に Monotocardien にありては腎臓囊と圍心竇との交通明に存するも余の種類にありては腎心竇管 (Reno-

抄 録

●「トリコニンフィード」の極めて面白い一新属

著者 CARLOS FRANCA は曾て *Annales de l'Institut*

Pericardialgang.) 全く消失せりき、之れ腎臓の退化と關係あるものならんと思ふ、又其の開口に特別の筋肉纖維なく又内面細胞の状態を觀察するも比の種の腎臓には多少の變調を來しざる事を察知し得べし、終りに一言すべきは SIMROTH 氏は前鰓類中寄生をなせるものには腎臓全くなしと斷言し置き乍ら之が退化の段階を觀察し得べし事にして且腎臓の全く消失せりと曰ふ事は速斷すべきべき事にあらずと思惟す。(未完)

挿圖説明

第六圖 1. 復成法による略圖、S.D.R. = Schalendrüse = 殼腺、Spalt = Spalt = 細孔、B.S.T. = Bindegewebsstroma = 結組織、D.a. = Darm = 腸管、N. = Niere = 腎臓囊、H.R. = Herz = 心臓、L. = Leber = 肝臓、A.bs. = Abdominalsinus = 腹心竇、M.a. = Magen = 胃、2. 腎臓の斷面圖、倍數、50:1. 切片の厚さ、10μ. OVI = Oviduct = 輸卵管、Ar. = Aorta = 動脈、L. (la.) = Leberlumen = 肝腔、NV. = Nierenvene = 腎臓脈、3. Die Kolbenartizelle. 1800:1. 10μ. 4. Die sezernierende Zelle 1800:1. 10μ.

Pasteur, T. XXX, 1916(メチニオン記念號)に *Trichonympha* 及び *Leidya* に屬する二種のものに就て記載したが本篇は其の續稿とも云ふ可く、彼れが研究した第三の種類の報告である、宿主はブラジル、サオ・トメ島 (Sao Thome) から得た *Neotermes gestri* F. SILV. 著者は之を新屬新種と認めて *Caduceia theobromae* と云ふ名を與へた。